

病牀雜記

芥川龍之介



一、病中閑なるを幸ひ、諸雑誌の小説を十五篇ばかり読む。

滝井君の「ゲテモノ」同君の作中にても一頭地を抜ける出来

栄えなり。親父にも、倅にも、風景にも、朴にして雅を破ら

ざるごと、もろこしの餅の如き味はひありと言ふべし。その

手際の鮮かなるは恐らくは九月小説中の第一ならん乎。

二、里見君の「蚊遣り」も亦十月小説中の白眉なり。唯聊

か末段に至つて落筆匆匆の憾みあらん乎。他は人情の如何か

知らねど、不相変巧手の名に背かずと言ふべし。

三、旅に病めることは珍らしからず。(今度も軽井沢の寐冷

えを持ち越せるなり。)但し最も苦しかりしは丁度支那へ渡ら

んとせる前、下の関の宿屋に倒れし時ならん。この時も高が

風邪なれど、東京、大阪、下の関と三度目のぶり返しなれば、

存外熱も容易には下らず、おまけに手足にはピリン疹を生じ

たれば、女中などは少くとも梅毒患者位には思ひしなるべし。彼等の一人、僕を憐んで曰、「注射でもなすつたら、よろしうございませうに。」

東雲の煤しのめふる中や下の関すす

四、彼は昨日「小咄文学」を罵り、今日恬然として「コント文学」を作る。宜うべなるかな。彼の健康なるや。

五、小穴隆一をあまりゆういち、軽井沢の宿屋にて飯を食ふこと五椀ごわんの後女中の前に小皿を出し、「これに飯を少し」と言へば、佐佐木茂索ささきもさく、「まだ食ふ氣か」と言ふ。「ううん、手紙の封をするのだ」と

言へど、茂索、中中承知せず「あとでそつと食ふ氣だらう」と言ふ。隆一、懽然むげんとして、「ぢや大和糊やまとのりにするわ」と言へば、

茂索、愈承知せず、「ははあ、糊のりでも舐なめる氣だな。」

六、それから又玉突き場たまつきばに遊びゐるたるに、一人の年少紳士しんし

あり。僕等の仲間に入れてくれと言ふ。彼の僕等に対するや、
 未だ嘗いま「ます」と言ふ語尾を使はず、「そら、そこを厚く中あて
 るんだ」などと命令すること屢しばしばなり。然れどもワン・ピイスを
 一着したる佐佐木夫人に対するや、慇懃いんぎんに礼を施して曰、「あ
 なたはソオシアル・ダンスをおやりですか？」佐佐木夫人の
 良人即ち佐佐木茂索、「あいつは一体何ものかね」と言へば、
 何度も玉に負けたる隆一、言下ごんかに正体を道破して曰、「小金こがねを
 ためた玉ボオイだらう。」

七、軽井沢かるあざはに芭蕉ばせをの句碑くひあり。「馬をさへながむる雪のあし
 たかな」の句を刻す。これは甲子吟行中の句なれば、名古屋
 あたりの作なるべし。それを何ゆゑに刻したるにや。因ちなみに言
 ふ、追分おひわけには「吹き飛ばす石は浅間あさまの野分のわきかな」の句碑ある
 よし。

八、輕井沢の或骨董屋こつとうやの英語、——「ジス・キリノ（桐の）

ボツクス・イズ・ベリイ・ナイス。」

九、室生犀星むろふさいせい、碓氷山上うすひよりつらなる妙義めうぎの崔嵬さいくわいたるを望

んで曰いはく、「妙義山めいぎざんと言ふ山は生姜しやうがに似てゐるね。」

十、十項だけ書かんと思ひしも熱出でてペンを続けること
能あたはず。

（大正十四年十月）

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和 46）年 6 月 5 日初版第 1 刷発行
1979（昭和 54）年 4 月 10 日初版第 11 刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007 年 6 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。